

## 8 トレイの設置方法

トレイ設置方法として、既存の資材を活用し、生産者自らトレイ台を設置しているのが一般的です。鋼管、もしくは鉄パイプとコンクリートブロックを組み合わせたものをよく目にします(図-8-1、-8-2)。当森林研究所の場合、鉄パイプ(直径19mm、長さ5.5m @1,580円相当)を使用しています(図-8-3)。その他に、水稲用の育苗トレイ(廃材)を積み重ねて鉄パイプの高さを調整し、育苗している例もあります(図-8-4)。いずれの方法も、空中根切り\*を想定しています。逆に、トレイを直接地面に設置しますと、コンテナ苗の根が地面(キャビティ外)に出てしまいますので注意が必要です。なお、トレイ台の高さは膝の高さ程度あれば、トレイの運搬等の作業性は高くなります。



図-8-1 軽天材を使用したトレイ台  
(豊並樹苗生産組合)



図-8-2 ハウス用ビニペットを使用したトレイ台(豆原山林樹苗農園)



図-8-3 鉄パイプを使用したトレイ台



図-8-4 水稲育苗トレイ(廃材)を使用したトレイ台(鏡野町生産者)

## 9 灌水(散水)

コンテナ苗の生産に当っては、夏場も含め、水の安定確保が必要不可欠となります。その上で、スプリンクラー等の散水施設があれば、これを使用し(図-9-1)、そうでなければ手灌水を行います。

コンテナ育苗を実施する場合、ハウス内では、トレイ表面の培地が乾燥しやすくなるため、種子の乾燥(発芽率低下)を防ぐ意味からも、ミスト灌水により、日に1~2回散水します。ミスト散水設備がない場合、目の細かいシャワー散水を実施します。

屋外(露地)では、できるだけ1回の灌水で、トレイの培地が飽和状態になるまで

しっかりと散水し、その後、乾いたら再び散水するように心掛けましょう。1回の灌水が少ないと、場合によっては、キャビティ内の根鉢下部が長期間乾燥状態となり、当該部分の根が枯死しますので注意してください。

トレイの培地が灌水等により飽和状態になると、JFA150 の場合、最大 6.5kg 程度に達します。一方、最もトレイの培地が乾いた状態では、3.5～4.0kg まで軽くなり（図-9-2）、これを下回ると、苗木が萎凋し始めます。このことを踏まえ、定期的にトレイの重量を計測することにより、灌水管理を徹底することをお勧めします。

今後の課題としては、一部の野菜において既に成長促進効果が認められている、ナノバブル\*装置（日本農業新聞 2020）について、コンテナ苗に同様の効果（地上部、地下部の重量増加）があるか、否かについて検証を進めていく必要があります（図-9-3）。



図-9-1 屋外での灌水方法  
（左側：スプリンクラー方式 右側：チューブ方式）

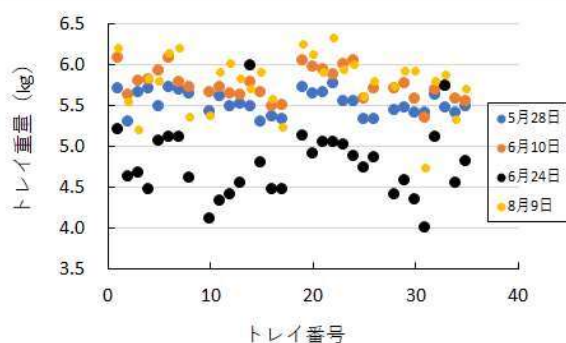


図-9-2 スギ・ヒノキトレイ重量の一例  
注. 岡山県森林研究所による調査 (2020)



図-9-3 ナノバブル装置の設置